

氏 名 拉加本

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2285 号

学位授与の日付 2022 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究——中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から

論文審査委員 主 査 檜永 真佐夫
地域文化学専攻 教授
韓 敏
比較文化学専攻 教授
奈良 雅史
地域文化学専攻 准教授
小西 賢吾
金沢星稜大学 人文学部 准教授
大川 謙作
日本大学 文理学部 教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 拉加本

論文題目

チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究
——中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から

本論文の目的は、チベットの伝統的三大地域の一つアムド地域に居住するチベット人の宗教活動の分析に基づき、チベット仏教一辺倒ではない信仰生活の実態を村の生活者の視点から明らかにすることである。この目的を達成するため、調査地は中国青海省海南チベット族自治州貴南県のボンコル村という村落社会を調査対象とした。同村は歴史的にモンゴル族などとの交流や影響を受け、龍羊峡ダム建設による村の移転の経験を有する。また、チベット仏教（以下、仏教）、ボン教、道教由来の神、アニミズム的民間信仰などが一村落において矛盾することなく併存し、複雑に混淆した信仰形態が見られる村である。

序論では、本論文の目的を示したうえで、17世紀に始まるチベット学の歴史をたどり、そのなかに本論文を位置づけ研究課題を示した。

第1章では、アムド地域が古くからボン教徒と仏教徒双方及び政治的亡命者にとって辺境の避難所であったのみならず、仏教、ボン教、道教、土着の宗教信仰が併存し混淆してきた地域であることを紹介した。アムド地域における調査地の地理的、歴史的特徴を描くために、ラーモ化身歴代の支配領域を図示しその影響力を考察した。また、ボンコル村の長老たちの口頭伝承の分析から村の歴史を再構成し、村の首長の系譜と伝統的社会単位である氏族「ツォワ」(clan)の実態を明らかにした。

第2章では、1958年以降、社会主義政策の影響を本格的に蒙ったボンコル村の社会が、ダム建設(1976年着工)による村の移転(1987年)を経てどのように変わったかを詳述した。移転後、半農半牧の生業は不安定で変化し続けたが、2005年以降、政府からの補償と経済的援助が活発になり、雑貨店や飲食店などが開業しはじめた。こうして新ボンコル村は、中国の社会主義近代化における典型的な「新しい」村落へと変容した。

第3章では、ダム建設による宗教施設の移転と村人の仏教的宗教活動の変化を考察した。特にラーモ化身の支部寺院と檀家村の関係はいかなるものかについて論じ、ボンコル村と仏教寺院との関係や仏教寺院の機能の変化を記述した。アムド地域の寺院と檀家村は寺領的な関係を持つのではなく、「チョ・ユン関係(説法師と施主関係)」を持ちつつ、それに留まらない並列的ないし相互依存的関係を形成していることを論じた。

第4章では、アムド地域の人々がアニエ・ユラと呼ぶ神の神格と起源、仏教とボン教の学僧たちがそれを護法神として扱ってきた経歴を描いた。アニエ・ユラ神は道教の文昌帝軍ないし文昌神である。村の民間信仰におけるアニエ・ユラ神は、雨乞いや雹を防ぐため畑の守護神、病気治しや子授けの神、結婚を占う神といった万能の神として崇められている。他方、漢民族とチベット族の信仰に共通しているのが、文昌神及びアニエ・ユラ神を知恵の象徴と見なしていることであった。

第5章では、マニ堂という宗教施設に注目し、そこで行われてきた齋戒悔過儀礼をめぐって村人の仏教的な宗教活動を考察した。マニ堂は一般に世俗者の仏教的活動の場であり、アムド地域の村落社会に広く存在する。だが、ボンコル村のマニ堂は単に民間の宗教儀礼を実施する空間ではない。むしろ、そこは仏教における大蔵経の保管施設であり、大乘仏教における布薩の八齋戒の厳守を促しその儀礼を正しく実施する、在家男女に開かれた高尚な「世俗」的寺院と言い得る存在である。加えてマニ堂は年中行事に関わる僧侶たちの読経会の場としての機能も果たしている。

第6章では、村のボン教徒が集う宗教施設「ボンボ御堂」における宗教活動に着目し、ボンボ御堂内の在家祭司の役割について考察した。特に仏教とボン教の混淆が著しい家庭レベルの儀礼として、仏教に改宗した家庭で行われるボン教的守護神の「ソソワ儀礼」について詳述した。彼らはソソワ儀礼以外にはボン教と関わらず、仏教徒がボン教のソソワ儀礼を行う矛盾を感じながらも重要な年中行事の一つと捉えている。ソソワ儀礼は信者とその生活空間を浄化するもので、穢れや邪悪なものを「身代わりのトルマ」に封じ込め戸外に投げ捨てるなどの儀礼である。

結論ではボンコル村の人々が実践している混淆した信仰生活がいかなるものかを総括し、それがいかに形成され、どのように変化しているかについて分析した。ボンコル村はダム建設による移転により故郷を喪失するという逆境を経験し、移転後も政府の様々な政策に翻弄されてきた。それによりコミュニティの結束は強化され、移転先での集住により日常生活における人々の交流が活発になり、村人の共同的な行事も増加した。近代化の過程で編成された生産隊が、村レベルの年中行事などの宗教活動でも実施単位になるなど、「創られる伝統」と呼び得る宗教復興が起こった。さらに近年活発になった政府からの移転補償金は、村の宗教活動を充実させ、共同的儀礼が行われる経済的基盤となった。故郷や「伝統」の喪失は、人々を新たな伝統を創ることに駆り立たせ、その関心が宗教活動に向かわせた結論づけた。

ボンコル村における宗教活動は、道教起源のアニェ・ユラ神信仰、仏教徒の家庭で行われるボン教的守護神のソソワ儀礼、仏教徒とボン教徒が共に祀る山神ラプツェ信仰などから成り立っていた。村人は神々や儀礼の由来や起源などをあまり意識せず、種々の宗教要素を区別することなく取り込み、それらが併存し一部は融合している混淆した信仰を「当たり前」の慣習的行為として実践してきた。本来、帰依対象が根本的に異なる仏教とボン教では、両者が混淆する宗教実践は教義上絶対に許されない。ところが、ボンコル村の人々は同一の神格を「右から見れば仏教徒、左から見ればボン教徒」と二面的に捉えることで教義上の矛盾に折り合いをつけ、両宗教の混淆を正統化してきたのである。

こうした混淆する宗教現象は多かれ少なかれチベットの村落社会に通底していよう。アムド地域やボンコル村だけが特殊というより、民族や歴史的背景、立地などによって程度の差はあるが、宗教活動の混淆は多くのチベット人村落にける普遍的な現象であり、それは人々にとっては当たりの慣習的行為で「無名の宗教」であったため、記述されてこなかったのである。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 拉加本

Title
論文題目 チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究——中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から

本論文は、中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村における信仰生活をテーマとした民族誌である。ボンコル村は、交通の要衝に位置するため古来モンゴル族や漢族の影響を受け半農半牧の生業を営むこと、20世紀には黄河の龍羊峡ダム建設により村と宗教施設が移転し再建されたこと、仏教、ボン教、道教、アニミズム的な民間信仰が併存することの3点によって特徴づけられる、住民すべてがチベット族(戸数581、人口2190人)の村である。本論文はその住民の宗教活動に関する精緻な記述・分析にもとづき、アムド地域のチベット族の日常生活に埋め込まれた宗教的混淆の実態に迫っている。

本論文は「序章」、本論部分の「第1～6章」および「結論」の計8章から構成されている。以下で各章の内容について、審査委員らによる講評も含め説明する。

「序章」では、チベット族の宗教的混淆の実態を解明するという本論文の目的、現地調査と文献研究の結合を特徴とする研究方法を明示し、その上で17世紀に始まったチベット学の学史の中に本論文を位置づける。そこで強調されているとおり、文献学的仏教研究の伝統が強い従来のチベット研究の枠組みの中では研究対象にされることが少なかった、民衆レベルの宗教に注目している点に本論文の独自性がある。

調査地の歴史的・社会的概要を示す第1章では、まずチベット・アムド地域への仏教、ボン教、道教の流入と定着の経緯が7世紀にまで遡って示される。次いで化身ラマの寺領下におかれたボンコル村の1950年代までの歴史、および父系氏族「ツォワ」に基づく村の社会関係が描かれる。

第2章で取り扱うのは、1950年代以降のボンコル村における社会経済の歴史的変化である。具体的には、社会主義的集団化による社会改造、龍羊峡ダムの建設(1986年完成)による村と宗教施設の移転、2000年代に入ってから顕著になった経済発展、という時代を区分する大きな影響を受けるなか、住民の生活がどのように変化してきたかを描き出す。特にダム建設による村の水没と移転、移転後の宗教施設再建のプロセスに関する記述は、現地でしか知り得ない情報が盛り込まれ詳細で貴重な民族誌データである。

仏教の活動に焦点を当てた第3章では、まず寺院と檀家村との関係が歴史的に整理して示される。その上で、ダム建設に起因する宗教施設の移転の前後で寺院に対する住民の関わり方がどのように変化したのか、3つの寺院のケースの比較検討から明らかにしている。その際、改革開放(1978～)下における宗教復興を単線的な宗教の活性化としてとらえるのではなく、高度な宗教的知識を持つエリート僧の増加と還俗による僧侶数の減少という宗教実践者の二極化傾向を指摘したうえで、寺院ごとに異なる復興のあり方をそれぞれモ

デル化して描き出した点に、本章の記述の際だった独自性がある。

第4章では文昌神に由来するアニェ・ユラ神信仰の実態が明らかにされる。道教との関係が密接な学問の神としての神徳を越えてチベットに土着化したアニェ・ユラ神は、雨乞い、雹除け、病気治療、子宝、縁結びその他あらゆる神徳をも備えた万能神として村で信仰されている。アニェ・ユラ神を祀る廟内部における供物の名称や配置、祈禱辞の内容を現地語概念の深い理解にもとづき解明した本章の記述は、民族誌的に非常に価値が高い。また道教神のチベット化現象に注目すること自体が、仏教学的チベット研究の視点からは新鮮なテーマであり独創的である。

第5章ではマニ堂で行われる齋戒悔過（ニユンネー）儀礼、続く第6章ではボン教の宗教施設「ボンボ御堂」における在家司祭の役割と、彼らがとり仕切る宗教活動「ソンワ儀礼」が描き出される。この2つの章における儀礼の記述は、難解な言語で展開し、しかも多くの参加者がそれぞれ異なった役割で参加している儀礼の全容を網羅的かつ分析的に明示している点できわめて貴重である。調査者自らが儀礼参加者となり、当事者としての視点から記述されている点もユニークである。また、第6章で、ソンワ儀礼が精密に体系化された儀礼として実践されていることが綿密な記述から論証されている点は、これまでのボン教研究において体系化されない「無名の宗教」として扱われていた宗教実践の内実に迫る重要な成果である。

「結論」において、第6章までの議論を総括したうえで強調されるのは、本論文で取り上げた宗教活動に住民たちがチベット仏教、ボン教、道教、アニミズム的民間信仰を区別せず、地域や親族の年中行事として参加し実践していることである。また、近年の経済発展が現地の宗教復興の動きをむしろ活性化させている現状が確認され、そこに今後の研究の発展の可能性が示唆される。

本論文全体に関わる審査委員の講評をまとめると、以下の通りである。

本論文は、チベット社会・文化研究の新たな潮流である、日本に留学したチベット人による自文化研究の成果である。中国人でさえ現地調査が困難なチベット地域でネイティブ・アンソロポロジストの強みを生かして8ヶ月間にわたって収集した民族誌データ、特に儀礼に関する詳細なデータは非常に充実していて、今後のチベット研究の発展に大きく資する貴重なものである。のみならず古典チベット語の深い造詣にもとづいて歴史文献をも広く活用することで、信仰生活に焦点を当てた民族誌として詳細で「厚い」記述に成功していることも高く評価できる。

次に本論文では、チベット仏教でより正統な教義を重視した実践がローカルな文脈においても志向される一方で、そこには含まれないボン教的あるいは道教的な要素をもつ土着化した宗教活動も活発化している状況が示されている。従来の宗教復興に関する研究では前者にのみ焦点を当てる傾向にあった。しかし本研究では SNS の WeChat を通した寺院と檀家の人々との金銭的やりとりや、民族を越えた漢族の寄進者の新たな獲得など、近年の宗教復興をめぐるダイナミックな動向にも注目することで、宗教の「純化」の運動の進展が、一方で、同時にそこから排斥されるものの活発化をも招くという、一見矛盾したプロセスを明らかにしている。この洞察は、一般的に現代社会における宗教復興のあり方を考える上でも示唆に富む。

もちろん問題点が指摘されなかったわけではない。内容に関しては、道教における文昌

神の由来と漢族の信仰に関する記述がやや単純化されすぎではないか、という指摘があった。他は引用文献表の順番の乱れや「用語集」における配列など、些細な技術的問題の指摘にとどまった。これらは本論文の意義と価値を損なうものではない。

以上により、審査委員会は全員一致で学位授与に値すると判断した。